



学校便り 6月号

かけはし

薩摩川内市立里小学校 薩摩川内市里町里 1601 TEL 09969-3-2008
発行 令和6年6月17日 責任者 校長 永野 俊也

学校HP



学校ブログ



里周辺海水温
23.6℃(6/8)

カズラタテ と 里文化

祝 市小学校綱引競技大会三連覇

校長 永野 俊也

すでに新聞報道等で地域の方々もご存じとは思いますが、去る5月29日開催された市制20周年記念第17回小学校綱引競技大会Bブロックに、里小5,6年チームが参加し、優勝。三連覇を達成しました。「全く危なげのない、堂々とした試合でしたよ。」と様子を聞き、里っ子たちの勇姿を思い浮かべ感動がこみ上げてきました。指導や応援していただいたみなさんに感謝するとともに、何よりも、



先輩たちのバトンを受け継ぎ、昼休み、練習に打ち込んできた子供たちの努力を讃えたいと思います。

一本の綱を通して結ばれた絆と、目標を持ち努力を継続することを、これからも大切に育ててください。そして目標達成できた時の充実感を忘れずに、今後も様々なことにチャレンジしてください。

さて、今月2日自治会対抗バレーボール大会の際、自治会長より「カズラタテが今年度復活する」との話がありました。コロナ禍ただ中の令和3年度に赴任した私は、里を代表するこの祭りを見たことがありません。ただ、150周年記念誌を編纂する中で、昭和40年代から残る学校文集「たまいし」に目を通した際、各年代の子供たちが「プープラプー・ガンガラガン」とその時の掛声や鳴り物の音の描写とともにいかにこの祭りを楽しみにしていて、そして楽しんだかが数多く書かれており、読むだけでその光景が浮かびました。「ようやく実際にその光景に出会える！」そう思うと今からワクワクしています。そして同時に、この里の伝統文化を後世にどのように伝えていくか、そのために学校は何ができるだろうか？と思いを巡らせました。150周年記念誌68p「おわりにそして未来へ」の章で、「甌島で、なぜ里地域だけこれだけ多くの地域行事を残すことができているのか？」との考察を行いました。「里地域の行事は、小組合単位から自治会単位、それでも維持ができない時は、村全体で継承するセーフティーシステムがあったからではないか。」と論をまとめました。その論でいくと、今年度のカズラタテは、里村全体で1つを作る最終ラインに達します。この最終ラインが機能している間に、持続可能なシステムが組み立てられなければ、いつかは限界点に達してしまいます。記念誌の中では、大学に通い若者たちと「地域の伝統行事をいかに残すか」と研究した内容を簡単に掲載しました。要は、今島にいる小中学生や、島を離れている若者たちが当事者意識を持ち、多くの人が関係を持とうとする状況を作れるようになるかが鍵となるのでは？ということです。ぜひ、親子で、昔のカズラタテの様子を伝えたり、「このお祭りを将来も残すにはどうすればいい？」など語ってみてください。子供たちの柔軟な発想が、思わぬ展開を呼び、道を開いてくれるかもしれません。

それにしても、大人も子供も好きな格好して化粧をして踊りまわるなど、現代のハロウィンの先を行くカズラタテ。発信の仕方によっては**バズる**(興味を持たれ爆発的に拡散される)かもしれません。キャラクターもカエルだったり、大蛇だったり、かわいくもあり、勇壮でもあり、そして時に危なくもあり、見どころ満載な気がしています。ところでなぜ「カズラタテ」なのか？里のカズラタテも、歴史的に変遷があるようですが、今では消えてしまった里の十五夜綱引き、その精神がカズラタテには宿り、とぐろを巻いたカズラどうしをぶつけ合い、とぐろが起きて立ってしまったら

主取り(ヌトイ)の判定で、負け！となる。だからカズラタテと言うそうです。

里の綱引きのDNAは、川内の大綱引とも違う、この里村の文化の中に、今でも息づいているのかも知れません。そう思いました。



学び多き 修学旅行!

5月14日(火)～16日(木)の期間、5・6年生が修学旅行に行ってきました。今回は、中津小学校と鹿島小学校と3校合同での修学旅行となりました。

天候にも恵まれ三日間の予定をすべて行うことができました。

主に、1日目は、熊本城見学、2日目は、大牟田市石炭産業科学館の見学やグリーンランドを楽しみました。3日目は、鹿児島市で水族館の見学や史跡巡りを行いました。

熊本県や鹿児島県の歴史や自然に触れたり他校のお友達と交流したりすることを通して、たくさんのお話を学ぶことができました。



7月行事

- 3日(水) 委員会活動
- 4日(木) 不審者対応訓練
- 5日(金) E S T来校
- 9日(火) 水泳学習参観
学級PTA
学校保健委員会
- 10日(水) クラブ活動
A L T来校
- 11日(木) かのこゆり号来校
- 12日(金) 方言に関する講演会
E S T来校
- 13日(土) 土曜授業
- 19日(金) 終業式・大掃除
A L T来校

平和集会

5月21日(火)に一段で平和集会を実施しました。塩田柚希さんが献花を行った後、代表で久保田羽海さんが「平和について考え里をよい町にしていきたい。」と言葉を述べました。



雑巾をいただきました



鹿児島県美容組合川内支部様から、雑巾をいただきました。清掃等に活用していきます。

「親子の絆」コーナー



「市小学校綱引競技大会に寄せて」

庵地 優さん・琴晴さん
キャプテンという立場もあり、チームのゆるみを正すため、厳しく指導する時もありましたが、それでもふてくされる事もなく、毅然とした態度を見せられた時は成長を感じました。これからも訪れる苦難・困難をしっかりと受け止めて、有難い人生を送って行って欲しいです。



琴晴：厳しい時もあったけど、強くなるように教えてくれて嬉しかったです。

甌島 縄文人の起源を考える！ このシリーズは、今回が最終回となります。

ですが…、せっかくカルデラについて調べたので、関連する別話題に少しふれます。それは、「島津氏の名の由来となった嶋津荘は、なぜ、当時日本最大の荘園だったのか？」(記念誌 44 p に関連)

地図を見てみると、あれ？ 嶋津荘って加久藤カルデラ中心に広がってない？ と今回ふと思いました。浸食された加久藤カルデラは、東に向かっては大淀川がやがて宮崎平野に至り、太平洋に注ぎます。そして西に向かっては川内川が、川内平野を経て東シナ海に注いでいます。平野部は多くの古墳が見られるように、古くから開墾されていましたが、2つの大きな川の上流へ向かって、新たに土地が開墾され、やがてそれは日向、大隅、薩摩の三州にまたがる巨大な荘園となったのであろうということが伺えました。またこの巨大な荘園は、今大河ドラマ「光る君へ」で話題の藤原道長の子、頼道へ寄進され、その後いろいろあって、最終的には藤原五摂関家筆頭 **近衛家** の所有が確定します。そしてその管理人として鎌倉幕府から派遣されたのが島津氏で、以来 400 年の長きにわたり島津氏と近衛家は近い関係にありました。ですから、外様大名で唯一、将軍家の妃を2名も出しているのは、徳川家よりはるかに歴史の深い藤原摂関家との結びつきが大きく影響していたと言えます。幕末有名な **天璋院篤姫** (てんしょういんあつひめ) は、薩摩藩島津家の一門今和泉島津家に生まれ、島津本家の養女となり、更に近衛家の養女として13代将軍・徳川家定に嫁いでいます。

最近、**地政学**と言って、地理的な要素と政治や歴史を結びつける学びが注目されるようになっていますが、確かに地理的視点が加わると、今まで気付けなかったことが見えて、よりおもしろく歴史を学べると思いました。

本題に入ります。近年になり、他の文明との関連がない孤立文明として世界的に注目を集めつつある日本文明。その中心となる縄文時代が、かなり先進的であったということが近年の研究で明らかになってきました。世界最古の土器 (16500 年前) を生み出しているばかりでなく、世界最古の漆器 (12600 年前) も日本で発見され、中国から伝わったという説が覆っています。

そして九州では、3 万年前、始良カルデラの噴火により旧石器人が壊滅的な状況に陥ります。その後長い時間をかけ、1 万 600 年前、縄文早期には、霧島市の上野原遺跡に見られる集落跡のようにすでにムラを形成し、定住生活が始まり、進んだ縄文文化を花開かせました。ところがそれも 7300 年前の鬼界カルデラの噴火によりリセットされてしまった。というところまでが、前回までの内容です。

今回、その縄文文化を調べるべく、4 月 27 日連休を利用し、**上野原縄文の森** を訪ねてきました。が、「えっ、まさか…」「閉まってる…」なんと改装工事中でした…。それでも国の重要文化財のレプリカ等は、簡易展示をしてくれていたもので、受付で「学芸員の方に説明をお願いしますか？」とお願いしたところ、学芸員の方が来られて、詳しいお話を聴かせていただきました。その方は、もと小学校の先生でした。話の流れで、「うちの兄は考古学が専門で、喜入の帖地遺跡の発掘に携わっていました。」と話したところ、「あなた、永野さんの弟ね？」と通じてしまい世間って狭いとも思いました。

話の中で聴きたかったこと、「鬼界カルデラの噴火で、上野原の縄文人はどうなったのですか？」との問いには、どうやら噴火の兆候があったらしく、みんなどこかへ逃げていて、噴火で亡くなった痕跡は見られないとのことでした。なんかホッとする話でした。(やっぱり甌島にも一部の人は避難してきたかもしれませんね。)



左の写真は、上野原遺跡で発掘された約 10,500 ～ 11,000 年前の円筒形と角筒形の土器のレプリカです。縄文早期とえば、こんな→  尖底土器が主であ

るのに、見事な平底です。縄文早期は、狩猟採取生活で移動し、外で煮炊きするため、地面に突き刺して使う尖底土器が便利なんです。平底の土器は、定住生活が始まり、ものを蓄えるようになったため発達したと考えられるそうです。それにしても 1 万年以上前に、こんな土器が存在していたとは、縄文人恐るべしです。

ちなみに、時代は 5 世紀ごろまで下りますが、甌島の名の由来となった甌とは  ←こんな形の土器による蒸し器です。大明神橋の手前の岩、昔はこんな形していたのかもしれないね。

南九州の縄文人は、どこからきたのか？ この研究は旧石器時代に遡らなければならないのですが、そこで障害となるのは、約 3 万年前に噴火した始良カルデラによるシラスの堆積層です。遺跡の発掘をしても、シラスの層に行きつくと、「や～めた。」となるそうです。それだけシラスの層は厚いんです。

それでも、場所によってはシラスの層が薄いところもあり、旧石器時代の興味深い遺跡が、県内で次々と発見されるようになってきました。出水市、上場小学校前の標高 450m の丘にある**上場遺跡**は、県内で初めて発見された旧石器時代の遺跡で、3 万年～1 万年の層に痕跡が残されています。そして**日本初となる旧石器時代の住居跡**が発見され、話題となりました。

また、曾於市の**耳取遺跡**からは、約 24,000 年前の日本最古となる石器による女性の**ビーナス像**が発見されています。さらに、種子島の**立切遺跡**からは、約 35,000 年前の日本最古の**落とし穴**が発見されているほか、**石蒸し料理**をしていたと思われる遺構などもあり、その住居跡も日本最古クラスと話題になりました。しかもすでに陸地と切り離されていたことから、この時代海を渡って移り住んでいたのではないかと、縄文文化が南九州で花開く以前から、南九州はすでに、優れた文化圏であったことが見えてきました。

↑復元された住居跡 (上野原遺跡) これらのことから、甌島の縄文人は、北からか南からかという論点ではなく、南九州で花開いた縄文文化が波及したと考えることの方が自然に思えてきました。そして、海洋民族として、独自の文化をもった甌島の縄文人は、やがて古事記により、海幸彦の伝承に組み込まれ、甌隼人と呼ばれるようになっていったのではないかとという考えに至りました。

みなさんは、どう思われるでしょうか？ おそらく校長住宅の床下に眠っているであろう、甌島の縄文人のみなさんに「実のところ、どうなの？」と尋ねてみたくなりました。

歴史のロマンは尽きることがありません。これからの新たな発見を楽しみにしたいと思います。 [完] (予告) 次号は、民俗学的見地からカズラタテを深堀する予定です。